

【最優秀賞】

未来へ～今こそ交流の架け橋を繋ぐ時～

標津町立川北中学校

2年 大垣 結愛

「近くて遠い島、北方領土」

北海道の東の端、標津町に住む私にとって、何度も耳にしてきた言葉。

野付半島から国後島までの距離はわずか十六キロメートル。晴れた日には、島の姿が肉眼ではっきりと見える。しかし、現在、島との交流は途絶えたまま。気軽に訪問することも叶わない。私達にとってその名の通り「近くて遠い島」なのだ。

一九四五年からロシアに不法に占拠されている北方領土。あれから約七十八年。返還されぬまま月日は流れ、今もなお、多くの人々が島への思いを抱えたまま暮らしている。年を追うごとに高齢化して行く元島民の思い、北方領土周辺の海で危険と隣り合わせに漁業を営む漁師の思い、小さい頃から島を眺めながら育ってきた私たち地域住民の思い。たくさんの人々が、島の未来への期待と北方領土の早期返還を日々願いながら暮らしている。

三十一年前から始まった交流の架け橋「ビザなし交流」。北方領土で暮らすロシア人と私達日本人との心の交流の場。この交流により、元島民は再び自分の生まれた故郷の地を訪れ、祖先への祈りも捧げることができるようになった。そしてまた、たくさんのロシア人が日本を訪れ、日本の文化や風習に親しみ、互いに相互理解を深めてきた。私の母や叔父も島を訪れた経験がある。私の祖母も、交流会に参加し、数多くのホームステイを受け入れ、交流事業に積極的に関わってきた。そして、直接ロシア人と会話し、お互いの考えやお互いの気持ちを通わせることで、北方領土に暮らすロシア人との絆を深めてきた。私も小さい頃から交流会に参加してヨサコイを披露し、一緒に縁日や会食で交流を続けることで、北方領土に関心をもち、そこに住む人々と心の交流を続けてきた。祖母と母、弟と家族で参加する交流会は、私にとって、北方領土返還に繋がる大切な機会でもあった。

しかし、今、北方領土に関わる全ての活動が止まっている。コロナウイルスの蔓延、ロシア政府の情勢、日本としての立場。ビザなし交流や北方墓参も中止が重なり、漁業関係については多大な影響が出ている。そんな中、ある日突然、貝殻島にある灯台が白く塗り替えられたのは最も衝撃的な出来事であった。元島民にとって、どんなに悲しい思いだろう。現在、元島民だった人達は皆、高齢化している。島の問題を解決するには今すぐにでも解決に向けて一歩前に進む姿勢が必要である。行政の立場として、元島民の立場として、そしてこれからの未来を生きる私達の立場として。私達が今できることは何なのだろうかと、一人一人が考え行動する必要があるのだ。このまま島との交流を途絶えさせてはいけない。だからこそ、再び交流の架け橋を復活させ、北方領土返還への早期解決の道を繋いでいくことが今、求められているのだと私は考える。